慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第一回総選挙・静岡県第五区における選挙戦：慶應義塾出身波多野承五郎を中心に
Sub Title	On the First general election of the Fifth election Area in Sizuoka Prefecture in 1890 : Focusing on Hatano Shogoro （Keio Gijuku Graduate）
Author	上野, 利三(Ueno, Toshizo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.11 (2011. 11) ,p.31- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20111128-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

第一回総選挙・静岡県第五区における選挙戦

――慶應義塾出身波多野承五郎を中心に――

上野利三

はじめに

明治二十二（一八八九）年に発布された憲法の付属法としての衆議院議員選挙法[1]に基づいて、翌二十三年七月一日に各選挙区（全国二五七区）で投票が行われた。各選挙区で繰り広げられた選挙戦の模様はさまざまな態様をみせることになる。

さて、その第一回衆議院議員総選挙に、慶應義塾出身の波多野承五郎が静岡県第五区の候補者として名乗りを上げた。彼は明治五年三月に十五歳で慶應義塾に入社し、同八年八月に卒業[2]、のち教員として残る。福沢諭吉の抜擢によるといわれている。同年五月には三田演説館が開館し、翌年以降塾内には協議社、猶興社（犬養毅ら）などの結社が生まれ演説会が繰り返されるが、波多野は尾崎行雄、加藤正之助らと協議社に加わり演説の腕をみがいた[3]。同十二年に塾を退職後、福沢の要請で交詢社の巡回委員となり、また郵便報知新聞社の主筆の一員として自由民権の説の拡充に努め、明治十四年には静岡県の南伊豆地方や静岡市で演説活動を行う。この時期に起こった政府官有物払い下げ事件に対する彼の鋭い批判は、県民の民権意識に強い刺激を与えたといわれる[4]。彼が出馬する選挙区を静岡県に定めたのは、彼が元遠州掛川藩士であったことに加えて、こうしたかつての活動が一つの機縁になったのではないかと思われる。彼が、選挙区を第五区に定めた理由は、彼をかつぐ集団がこの区にいたらしいことが考えられる。彼は改進主義に近い立場であったが、福沢を介して三田出身者らに大隈重信から入党要請があった際、彼は政党外に独立する、

と伝えていた。立候補した者の中に最有力者として西尾傳蔵[5]がいたが、西尾は一度改進党に入党したのちに脱党している。かかる相手を組みしやすしと考えたのかもしれない。彼が第五区の候補となる噂がある、という報道が流れたのは三月十四日付『新聞』紙上であった（当時外務省書記官に在職し行政の経験を積んでいる）。

波多野と同じく在京の「輸入派候補」で静岡県第三区から出馬した岡山兼吉（改進党員、東京大学法学部卒）は順調な滑り出しを見せていた[6]。このことは波多野に勢いを与えたことであろう。

第五選挙区は、遠江国の豊田・周智・山名・磐田郡の四郡からなっていた。有権者数は豊田郡が八五三人、周智郡が四二八人、山名郡が八六八人、磐田郡が四十二人で、合計二、一九一人であった[7]。豊田・山名両郡が比較的大票田であったといえる。候補者たちの票取り合戦はこれら大票田から始まったと見られるが、波多野だけが山名郡では苦戦を強いられている[8]。

この選挙区での主な候補者は四名に絞られており、県内でも格別熾烈な戦いが繰り広げられ、投票日が近づくにつれて区内の選挙戦は白熱し、混戦模様を呈していった。

結局波多野は六四五票もの票を獲得したが、豊田磐田山名郡長を務めた西尾傳蔵（獲得票数七四六票）に百票差で敗れる。西尾が選挙区の四郡中、三郡の郡長を務めたことが、終始選挙戦に極めて有利にはたらいた。

本稿では第五選挙区における波多野の選挙戦の模様を中心に、他候補の運動もあわせて調べていくこととする[9]。なお波多野の政治信条や経歴については『静岡県第五区候補者波多野承五郎君小伝』（国会図書館蔵）等に詳しいが、これについては別稿に譲る。

（1）衆議院議員選挙法の概要については、拙著『日本初期選挙史の研究　静岡・三重編』（和泉書院・二〇〇九年十二月）を参照。

（2）『慶應義塾入社帳』第五巻、一三四頁。

（3）俗に、協議社の演説はハイカラ調、猶興社はバンカラ調といわれ、演説の調子が異なっていた。ちなみに、波多野の孫智子は犬養毅の孫康彦に嫁いでいる。

（4）静岡県民権百年実行委員会編『ドキュメント静岡県の民権』一九八四年、一二九頁以下。

（5）結果的に波多野を破った西尾傳蔵は、豊田郡友永村生まれ。明治十五年に豊田山名磐田郡長になり、同十八年に郡長の職を辞した。十九年一月県会議員に選出、二十三年七月一日の総選挙時点で県会議員の職にあった。主

義は改進の立場であったが、いまだ政党に与していなかった。なお彼の略歴は附論として後記した。

（6）拙著・前掲『日本初期選挙史の研究』六三頁以下。

（7）「各区選挙者の人員」（明治二十三年五月三十日付『静岡大務新聞』〔以下、『新聞』と略記〕）。ただし衆議院事務局編『衆議院議員総選挙一覧』（京都大学人文社会研究所所蔵）では二、一八八人とする。これが確定数字と思われる。選挙人名簿が確定したのは六月十五日であった。なお各選挙長から監督者である時任知事に上申されたのは六月十六日のこと（六月十七日付『新聞』）。各郡の有権者数が判明するのが五月三十日付『新聞』であるので、それを掲げた。

（8）五月十一日付『新聞』。三月九日開催の山名郡の予選会では寺田彦太郎が断然一位で、波多野は一票も得ていなかった（『新聞』三月十二日付）。

（9）本稿は当時の新聞に掲載された記事を整序して第一回総選挙の情勢を各府県各選挙区ごとに概略を把握しようという試みの一環である。新聞それ自体は記者の素原稿を編集して成っているので資料価値はおちる。だがあえてこれを用いる理由は、第一に明治二十三年頃の選挙史を包括的に跡づける資料が乏しいこと。第二に、日本初となる総選挙の過熱した中で新聞社は多くの記者を投入して候補者の取材に全力を尽していること。第三に、当時の有権者名が新聞に多数散見でき、亡佚した『選挙人名録』を多少とも復旧しうること、等々である。

一　総選挙までの第五区の政治状況

在京の波多野にとって、地元で着々と政治的実績を積んできた候補者たちを相手に戦うことは至難なことであった。その点に関して、知られる範囲で四名の候補者たちの出馬に至るまでの経緯を見ておこう。

静岡県で最初の演説結社として登場するのは参同社である。大江孝之や広瀬重雄、平山陳平に代表される士族出身の知識人は早くから民権に目覚め、新聞雑誌により国会開設を呼びかけたが、演説での啓発の効果を認めて、豪農商層とともにこの民権結社を結成したのである。社名の参同とは、駿遠豆州の三州の有志者たちが親ぼくを深め一致協力して一般県民の民権知識の啓発をはかる、という意図を込めて名付けられたものである。その第一回大会が明治十二年二月十六日に静岡県民会議事堂で開かれ、後に第一回総選挙に立候補する江原素六、高田潤作、和田伝太郎、依田佐二平、岡田良一郎などとともに、この第五区の足立孫六も豪農の一人として出席した。[1] 足立はこの会の結成直後

に周智郡長に任命されている。[2] この人事は、自由民権運動から豪農層を遠ざけようとする県令の方針の一環であった。足立はこのため運動から離脱することを余儀なくされた。

参同社が誕生した明治十二年一月に、浜松では己卯社（きぼうしゃ）が結成された。主唱者は近藤準平（第六区当選者）、松島吉平（第六区立候補者）らであった。この社は活動の中心を年六回開催の会議に置き、「凡そ社会万有事理に就き各自思想を陳べ、討議を尽し、…以て官民の便益を助くるを要旨」としていた。[3] しかしやがてこの社は集会条例公布の影響や、中心人物である近藤、松島らが県吏となり離脱したため有名無実化した。また総選挙の年の明治二十三年一月、遠陽大同倶楽部発起人の一人松島吉平は他の三名と同倶楽部を脱会し、[4] 後に東京の大同倶楽部に入会している。[5]

その後、第五区関係の郡内で結成された民権結社としては、明治十三年周智郡山科村の協和会、明治十四年山名郡袋井駅の益友会、同年三月見附駅の遠州有志同盟会等がある。遠州有志同盟会には竹山謙三（第六区の立候補者）が参加しており、立憲政体、権利の拡張を目的としていた。[6]

明治十四年の開拓使官有物払下げ事件に反対する民権派の激しい運動は第五選挙区にも及んだ。九月十八～十九日に第五区の中心である見附駅で開かれた遠州有志同盟会本部定例会にそれが議題として上がり、会員の活動は活発化した。県会議員であった西尾傳蔵や竹山謙三らは演説会を開くなどして活動した。

九月下旬には、慶應義塾関係者を中心に創立された社交クラブの交詢社の巡回委員である波多野承五郎が静岡県を訪れ、伊豆地方（松崎、修善寺等）、静岡市等に官有物払下げ問題とともに熱心な建白勧告を説いて回り、そうしたことが影響して再度の国会開設建白書の提出が急遽決まった。[7] 建白者総数は一万九、〇八九名であった。

（1）前掲『ドキュメント静岡県の民権』八四頁・九四頁以下。
（2）本稿附二の足立の略歴を参照されたい。
（3）『静岡県史　通史編6近現代二』平成九年・二四八頁。
（4）一月二十三日付『新聞』。
（5）前掲『ドキュメント静岡県の民権』二四四頁以下。
（6）前掲『静岡県史　通史編6近現代二』二五〇頁。
（7）同右、一三一頁。前掲『波多野承五郎君小伝』。

二　波多野承五郎の選挙運動

交詢社の巡回委員として静岡県を訪れ、県下を遊説して回った波多野は、各地に縁故関係を結んでいた。立候補後の彼の選挙運動は、そうした縁故にたすけられ、各地に演説会を開催していくことになる。その演説会活動の回数の多さといい、支援弁士の豊富さといい、他を圧倒するの感があった。それを順次以下に見ておこう。

1　五月二十四日、波多野の一行は豊田郡十束村の有力者である帯金直枝、関塚亀太郎、大庭市作、小池弥太郎、村上長吉、斎藤新平らが開催する演説会および懇親会に臨んだ。(1) 聴衆は二百余名。村上が、開催の趣旨として総選挙は「地方的な感情に制せられるべきではない」と述べた。次に中津川敬三郎、横井傳右衛門、鈴木芳之助、北川礼弼らが各々の所見を述べ、最後に波多野が登壇した。彼は内治上外交上の緊急必要問題について詳細かつ綿密に演説した。それは一時間半にも及んだという。その後の懇親会は、会場を十束尋常小学校に移し九十名余りが参加して行われた。村上が主唱者一同に代わり開会の要旨を述べ、戸倉実太郎、鈴木浦八、北川、鈴木良平、高須米次郎、村上等が次々に立ち、また北川が東浅羽村の同志者戸塚弥三治から寄せられた書簡を朗読した。最後に波多野が演説して宴を終え、散会は午後九時ごろであった。

2　五月二十八日、波多野らは中泉町の同志者である中津川喜惣治、河野繁太郎、喜多川藤次郎、山田孫次郎、松井半平等が主唱した同町尋常小学校での懇親会に出席した。(2) 参加者は六十名余り。その中には、天龍村の金澤太郎次、山田重太郎や西具村の安間藤太郎ほか数名も臨席していた。中津川が主唱者総代として開会の趣旨を述べ、続いて横井傳右衛門、田代英作、鈴木芳之助、北川礼弼らの随行メンバーが各々所見を述べ、波多野が政治上の見解を論じた。その後立食の宴が開かれ時事などが談じられた。会が撤収したのは午後九時過ぎであった。

3　五月二十九日、波多野は周智郡森町の有志家安中次郎が会主となった演説会に招かれ、同町中村座で演説を行った。(3) この日の演説会に関しては、既に新聞で大々的に予告の広告が打たれていた。(4)

来ル二十九日午後三時ヨリ中泉町豊国座ニ於テ
政談大演説会
弁士　波多野承五郎
北川礼弼
黒岩周六
河井重蔵
湯浅凡平

光吉元次郎
鈴木芳之助
横井傳右衛門

予告では、演説会の場所が豊国座となっていたが、中村座に変更になったと思われる。

この地方は商業には機敏で政治上には疎いと思われていたが、三百名余もの聴衆が集まった。(5) 鈴木芳之助が会主に代わって開会の趣旨を述べた。戸倉実太郎が「候補者の履歴を研究すべし」を、鈴木は「運動の時期」を、北川は「選挙人の心得」をそれぞれ演じた後、波多野が登壇し「政治上意見中条約改正責任内閣政費節減冗官陶汰等の如き要項に就きて内外の事情に照らして精覈に論じ」、拍手喝采を浴びた。散会は午後七時ごろ。

なお、予告に挙げられた弁士のすべてが当日参加したかどうかは分からない。六月一日付『新聞』の記事では、戸倉、鈴木、北川、波多野の四名の弁論が記されているが、黒岩や河井、湯浅、光吉、横井ら五名の論題は見えない。予告の前触れは大々的であったが、実際はもう少し小規模な演説会であった可能性がある。

4　五月三十日、周智郡園田村の安中保次郎が会主となり、波多野らを招いて演説会が開かれた。(6) 会は同村谷中区太僧院で開催された。聴衆は百三十余名。大橋弥兵衛が会主に代わって開催の趣旨を述べた。次いで戸倉、鈴木、北川らが所見を述べ、波多野が最後に立ち政治上の見解を一時間半にわたり丁寧、巨細に論じた。午後七時に閉会。

5　五月三十一日、波多野とその随行北川、鈴木、戸倉、大橋らは、周智郡山梨村の有志家村松宇百、幡鎌隆俊、山名直吉諸氏の招へいに応じて、同村上山梨区の用福寺での演説会に臨んだ。(7) 大雨であったが聴衆は三百名を数えた。警官の臨場があった。戸倉惣兵衛が開催の趣旨を述べた。戸倉実太郎、鈴木、北川らが交互に登壇して候補者の履歴を知るの必要、あるいは運動の時期、あるいは選挙人の心得などの演題に就いて論じ、最後に波多野が、第五区の候補者になった所以から説き起こし、外交上の問題となっている条約改正、あるいは政費節減、冗官陶汰等について一時間にわたり雄弁をふるった。

6　六月一日、豊田郡岩田・富岡両村の有志者鈴木浦八、平野忠七、左口清三郎、青島猶吉等が主唱者となり、波多野らのために両村連合懇親会を富岡村加茂西区の富岡尋常小学校内において開催した。(8) 参会者は岩田・富岡ほか長野・井通・池田各村におよび、波多野の随行者を併せると百余名となった。鈴木浦八が開会の趣旨として「選挙人諸

君は虚心平気を以て候補者を選挙すべし」と演じ、鈴木芳之助は「国会の歴史その本質及び国会と選挙人との関係」を述べた。横井傳右衛門は「反対派の錚々たる人々が候補者の適否を論ずる論理に輸入的若くは土着的若くは踏襲的の如き事を以ってするの妄想なる所以」を弁明した。大橋弥兵衛は「波多野氏の履歴に就いて」を、北川礼弼は「世には表裏反覆の候補者ありて朝に衆議院の議員たらんことを公言し夕に貴族院の議員たらんことを秘密に希望せんとし又た県会議員の職務を利用し選挙人に啖はすに地方税補助の餌を以ってするものも或はなき事を保証すべからず若し第五区中にかかる心事の卑劣なる陰険なる候補者万々一にもありとせば諸君は選挙権を濫用すべからざる事を顧み務めて之れを排撃せられんことを希望す」と論述した。波多野は「外交問題中の条約改正及び責任内閣、地租軽減、兵制等」について一時間四十分にわたり演説した。酒宴の席が開かれ、鈴木浦八、鈴木芳之助、鈴木徳次郎、青葉縫次郎、鳥居藤蔵などが演説し、その後北川礼弼が戸塚弥三治からの書簡を朗読した。波多野は「余は立憲国民の模範を示さんがために公明正大と認め得べきものは運動上の手段となすにはばからずとて是れまで運動上に用い来りたる手段の歴史」を詳細に演説し、拍手喝采を浴び満堂を動かした。午後十時ごろ会を閉じた。

7　六月四日、山名郡西貝御厨爾村の有志者安間藤太郎、山岡辰蔵、太田久平、太田滝三らが主唱者となり、同村西之島区の大悲寺に波多野を迎えて演説会を開催した。[9] 来会者は百七十余名。堀内精三郎は「与論の定義」、横井傳右衛門は「人の惑を解く」、鈴木芳之助は「国会の性質」、北川礼弼は「選挙人の心得」、波多野は「外政内政に関する意見」の要項数カ条を論じた。その後の懇親会には六十名が参加し、席上安間は会の趣旨を述べ、続いて鈴木、北川らが再び演説した。午後四時に演説会が開始されてから九時過ぎに懇親会が終了するまで五時間余りの長丁場であった。

8　六月五日、豊田郡向笠村の有志者青島保吉の招請に応じて北川礼弼、鈴木芳之助、熊谷三郎馬、横井傳右衛門、堀内精三郎、戸倉実太郎らとともに、同村竹の内新豊院において開かれた演説会に臨んだ。[10] 聴衆二百名。匂坂東太郎が開会の趣旨を述べた後、戸倉、横井、鈴木、北川がそれぞれ所見を演述し、次に波多野が登壇した。前四名の演述で時間が迫ってきたため縮小して、外交上内治上の重要問題二、三点につき縷々述べ、会の閉幕を告げた。その後会主より波多野一行と地方有力家として知られた寺田新太郎、

同春吉、同吉次郎、馬渕甚太郎、同八郎、上野博之、西尾政太郎、金丸重朗のほか二十名ほどが晩餐会に招かれた。時事政治を談じて午後十時ごろ解散した。(11)

9　六月七日、波多野らの演説会は、豊田郡今井村小山区の雲江院で同村の有志者大場平七郎を会主として開かれた。(12) 聴衆は二百名。午後五時から会主に代わり鈴木芳之助が開会の趣旨を述べ、次に戸倉実太郎が候補者の履歴を研究すべきことを論じ、横井、鈴木と続いた。北川は選挙人の心得となるべき点を簡潔に述べ、波多野の登場となった。彼は、内政外務に関する要項数条を快活かつ確実に論述した。満堂の喝采を博し散会となった。以後、会主より波多野一行と同地方の有志者二十名余へ晩餐の饗応があり、一同が退散したのは午後九時ごろであった。

10　六月八日、波多野は豊田郡天龍村千手堂区の千手寺において演説会を開催した。(13) 同志者金沢太郎次、密岡惣三郎、鈴木佐之四郎、山田重太郎ら諸氏の招きに応じたもので、彼は北川礼弼、横井傳右衛門、中津川敬三郎、堀内精三郎らとともに参加した。農事多忙のおりにもかかわらず、各村から参集する者は三百名にも上ったという。午後五時から土居藤次郎の開会の趣旨弁舌に始まり、中津川、堀内、横井、北川らの意見演説についで、波多野が登壇した。彼は、候補者となった以上は、「己が抱持する意見を公衆に発表してその取捨を選挙人諸君の公平なる良心に訴えざるべからず」として、改めて政治上の持論である条約改正、責任内閣、政費節約、冗官陶汰、地租軽減などの諸項目について巧な弁舌で演述した。閉会は午後十時過ぎ。

11　六月九日、波多野らは山名郡豊浜幸浦両村の有志者伊藤熊十郎、鈴木太郎三郎、内野惣次郎、永田源三郎、竹原源吉、内野保次、安間仲らの招きで、幸浦村港区の万福寺において両村同志懇親会を開いた。(14) 三十名ほどが出席した。安間の開会の趣旨に続き、戸倉実太郎、戸塚弥三次、酒野繁太郎、北川礼弼、波多野らの演説についで、宴席に着き、高談壮話に数刻を費やして十時過ぎに解散した。

12　六月十日、波多野は豊田郡赤佐村の有志者池本博、町田磯吉、竹内芳太郎、同源七などの招きで同村尾野区の琴平神社の社殿で午後五時から演説会を開いた。(15) 当日は大暴風雨の中五十名余りが来聴した。会主池本が開会の趣旨及び選挙人に関する一題を弁じた後、鈴木芳之助、北川礼弼、波多野らがそれぞれ所見を述べて閉会した。その後有志者らは波多野一行と地方有力者十有余名を晩餐に招き、席上旧盟を温め新交を締し、午後十一時過ぎに散会した。

13　六月十一日、波多野は周智郡園田村第二の演説会に

臨んだ。[16] 赤佐村に一泊した後そこからの直行であったが、遠隔地の上、雨後の泥るんだ道路を通り午後五時過ぎに会場の園田区全生寺に到着した。直ちに会主安中保次郎に代わって鈴木芳之助が開会の趣旨を述べ、続いて堀内精三郎、鈴木、北川らが順次演説し、最後に波多野が登壇して政治上の意見として「外交問題もしくは内政上地方の自治と中央集権の弊害について」を約四十分間にわたり弁舌した。午後八時半ごろ閉会。

14　六月十二日、波多野は北川、鈴木、横井傳右衛門たちを引き連れ、周智郡飯田村の飯田区崇信寺で午後四時から始まる演説会に臨んだ。[17] 鈴木が会主に代わって開会の趣旨を述べた後、横井が人の惑いを解く、の一題を弁じ、鈴木は国会を如何にすべきや、の一題を、北川は第五区の名誉を全うせよ、をそれぞれ演じた後、波多野は政治上の意見を述べるに際して、自らが「第五区の候補者となった所以は諸君の政治上の境遇と自己の政治上の境遇とがほぼ同一にあること」から説き起こし、次いで条約改正、責任内閣、政費節減、地租軽減、及びその改正法などについて、一時間四十分にわたって演述した。聴衆は静粛の間に聞き終え、午後七時過ぎに閉幕した。

15　六月十四日、波多野は山名町川井区の円通寺で、同地の有志者小野源次郎、鈴木善作、水野伊平、寺田源八、鈴木八郎衛門、同市郎衛門諸氏の主唱により、招かれて演説会を開催した。[18] 戸倉実太郎が開会の趣旨を、鈴木芳之助が「此の国会を如何せん」を、北川礼弼が「第五区の名誉を全ふせよ」を順次弁舌し、波多野が例の政治上の意見を述べて閉会した。続いて主唱者より晩餐の饗応があり、久努西村の永井五郎作、同伊三郎、久努村の村松徳三郎、鈴木銀蔵らを始め約四十名の列席があった。席上鈴木市郎衛門が演説し、午後九時過ぎに退散した。

16　六月十五日、波多野は山名郡田原村の有志者池端源七、大滝平七、田中平八らの政治上の意見を聞きたいとの要望で招かれ、午後四時から同村西島区の全海寺において政談演説会を開いた。[19] 安間泰義が開会の趣旨を述べた後、戸倉実太郎、鈴木、北川らが順次登壇して弁舌し、最後に波多野が快舌を奮い政治上の意見を説いた。閉会後に開かれた懇親会には六十名余りが列席し、安間が会の主旨を述べ、献酬の間に鈴木市郎衛門、戸塚弥三次、波多野らの演説があり、会員一同歓を尽くして午後十時ごろに退散した。

17　六月二十三日、豊田郡中の町村の川村京二郎、田中新十郎、豊西村小栗儀一郎、竜地村長谷川栄三郎の諸氏は、諸村の選挙人と有志者四十名余りを笠井村山形屋に招き、

波多野一行を聘して懇親会を開いた。[20] 川村が開会の趣意書を朗読し、次いで北川礼弼が演説、波多野が登壇して条約改正を速やかに行うこと、政費節減、官吏淘汰とその方法、ならびに地租軽減の方法などを詳述した。そのほか横井傳右衛門、熊岡安平らも演説。出席者は互いに時事を談じ、候補者の優劣を批評し歓談して十二時頃に解散した。

18　六月二十三日、波多野は、山名郡西浅羽村富里区の名望家溝口健次郎の招待に応じ、北川礼弼、鈴木芳之助を引率して、同氏宅での演説会に出席した。[21] 参集者は二百名ほどであった。会主溝口が開会の主旨を述べた後、鈴木は「国会を如何にすべきや」、北川は「第五区の名誉を全ふせよ」、河井重蔵は「地方紳士を論ず」をそれぞれ演じた。河井が「西尾足立両氏の履歴上性質上より国会議員に不合格なる所以を事実に照らして痛撃」すると会場からは賛同の拍手が満場に鳴り渡ったという。波多野は地租軽減及び地租改正案など彼得意の政治上の意見を述べた。午後九時過ぎに閉会した。

19　六月二十四日、波多野は、山名郡東浅羽村の有志者戸塚弥三次、岡本三次郎両氏の主唱で、同村新堀丈八において演説会を開催した。[22] 会主戸塚が開催の趣旨を述べた後、鈴木芳之助が「帝国議会を完全ならしむるには宜しく各区より選出する所の議員をして充分政治上に経見（ママ）あるものならしむべき旨」を弁じ、北川礼弼が「議員を選むには能く其人物を考へ無学者流、鳥なき里の蝙蝠の如き人物を選ばざる様注意すべき事」を論じ、波多野は「現行条約は対等条約に改正せざる可らざる理由及地租を改正して租税を軽減す可き事」を詳論した。閉会後、茶話会が開かれ、席上東京の弁士光吉元次郎、湯浅凡平二氏と波多野の演説があり、盛会のうちに午後十一時ごろに解散した。

20　六月二十五日午前十一時より、久努西村の名望家永井五郎作、山田多三郎らが主唱者となり、波多野を招いて同村海蔵寺に演説会を開催した。[23] 当日は炎暑の中を聴衆二百余名が集った。戸倉が会主に代わり開会の趣旨を述べ、北川、波多野が順次登壇し演説した。その後懇親会に移り、席上、光吉、湯浅の演説があり、杯酬の間、会主永井、戸倉、熊岡安平らも演説をした。午後七時ごろに散会。

21　六月二十五日周智郡森町の安中保次郎が会主となり、波多野を招いて政談演説会を西光寺で開催した。[24] 当地は元来足立派が大勢を占めている所であるので妨害が予想された。しかし場内は七百名余りもの聴衆が詰めて立錐の余地がなかった。反対派の聴衆も多く入り込んで妨害も少なくなかったという。弁士は北川と波多野の二名。北川は「第

五区の名誉を完ふせよ」との題目で、「国会議員に要すべき三箇の性格より論じ起し進んで足立、西尾、寺田の三候補者に一々痛評を加へ」た。波多野は政治上の意見として「地租軽減案及び町村基本財産案」を述べ、あわせて「反対派の攻撃する無主義無節操及び踏台なんど言へる事」を弁論した。午後十時過ぎに終えた。

22　六月二十五日夜、波多野派の懇親会が、上浅羽村の有志者小池直吉、金原紋吉、村井銀次郎、加藤喜太郎らが主唱者となり開催された[25]。来会者は四十名余り。村井が開会の趣旨を述べた後、東京から出張して来た弁士二人が登壇した。すなわち光吉元次郎は「帝国議会議員候補者たる者の資格を論じ、結局第五区においては波多野氏の他に適当の人物なき」旨を演述した。もう一人の湯浅凡平の演説について『新聞』は触れていない。その後の懇談は夜の十二時過ぎまで続いたという。なお波多野は欠席した模様。

23　六月二十九日、中泉町豊岡座で開催された波多野派の演説会は、聴衆二千有余名を数える未曽有の大盛会と当地から打たれた電報にある、と『新聞』は伝えた。

なお、西尾との接戦が伝えられる波多野派の中には、「非西尾賛成者」という広告を出す者まで現れた[26]。

非西尾賛成者

曩ニ西尾派ハ吾輩ヲ誘フニ甘言ヲ以シ強テ其賛成者タランコトヲ求メタレトモ吾輩ハ西尾ノ如キ人物ヲ堂々タル国会議場ニ出スヲ好マズ故ニ断然其誘惑ヲ拒絶シタリ然ルニ六月二十二日ノ静岡大務新聞ニ吾輩ヲ西尾賛成ノ如クニ広告シタルハ不埒也吾輩徹頭徹尾第五区第一ノ人物タル波多野承五郎氏ヲ推戴シテ吾人ノ代表トナシ我静岡県ノ名誉ヲ天下ニ輝サント欲スルモノナリ

浅岡長八
近藤謙次郎

以上見てきたように波多野の演説会は大票田の郡を押さえているかに見える。そして参加した弁士は、中津川敬三郎、横井傳右衛門、鈴木芳之助、北川礼弼、戸倉実太郎、田代英作、大橋弥兵衛、黒岩周六、河井重蔵、湯浅凡平、光吉元次郎、堀内精三郎、戸塚弥三次、酒野繁太郎、熊岡安平、等々多士済々である。中でも横井、鈴木、北川、戸倉の四名は弁士としての登場回数が多く、演説会を組織した中心メンバーであったと考えられる。波多野の演説は、条約改正、責任内閣、政費節減、冗官陶汰、地租軽減及び地租改正案、兵制、町村基本財産案等が骨子となっていたようである。なお各町村有志者等として名前があがってい

る人達は概ね有権者と考えられる。

（1）五月二十八日付『新聞』。
（2）五月三十日付『新聞』。
（3）六月一日付『新聞』。
（4）六月二十八日付『新聞』。
（5）六月一日付『新聞』。
（6）（7）六月三日付『新聞』。
（8）六月五日付『新聞』。
（9）六月七日付『新聞』。
（10）（11）六月八日付『新聞』。
（12）（13）六月十一日付『新聞』。
（14）六月十三日付『新聞』。
（15）六月十四日付『新聞』。
（16）六月十一日付『新聞』。
（17）六月十七日付『新聞』。
（18）六月十八日付『新聞』。
（19）六月十七日付『新聞』。
（20）六月二十五日付『新聞』。
（21）六月二十六日付『新聞』。
（22）～（25）六月二十八日付『新聞』。
（26）六月二十七日付『新聞』。

三　西尾傳蔵の選挙運動

1　西尾の懇親会開催

西尾の開いた懇親会は以下の三回だけが伝わっている。波多野には遠く及ばないが、懇親会は演説会に比べると、有権者獲得により焦点が絞られている。また彼を支持する推薦者の新聞広告が群を抜いているので、着実な有権者の勧誘に重点を置き票の獲得を行っていたことが判明する。

1　五月二十五日、西尾は配下の久野治太郎、大杉善一郎、浅井才一郎等を引き連れ、豊田郡赤佐村での懇親会に臨んだ。[1] 会する者は土地の有力者三、四十名であった。午後三時ごろに配膳が終わると、岩淵義一が開会の趣旨を述べ、西尾をおいて外には適当な候補者はいない、と演じた。浅井才一郎は、西尾は学術に富み経験が豊かであると論じた。次いで西尾自らが立ち、平生抱いている意見を吐露した。三十日付『新聞』は以下のように記している。

本県土木費の話より教育上の事に及び教育は個人的教育の非なるを述べ国家的の主意なるを要すと論じ条約改正は飽くまで対等ならざる可からざるを説けり

これによると西尾の見解は、教育は国家的な問題である

こと、条約改正は対等であるべきこと、等に集約される。

演説は西尾に続いて雄弁をもって知られた大杉善一郎が立ち、西尾と波多野その他の候補者を比較して西尾の優秀なるゆえんを力説した。二、三の弁士が論じた後、久野治太郎が天皇陛下万歳、満堂諸君万歳を唱えて散会となった。

2　五月二十九日、西尾は参謀久野治太郎らを従えて、豊田郡敷地村の敷地学校での懇親会に臨んだ。[2] 会場には「衆議院選挙人懇親会」と記された大旗が立てられた。参会者は「選挙人」五十有余名。主唱者総代伊藤某が開会の趣旨を述べ、次に久野が第五区候補者の数ある中で最もその任に適する者は西尾をおいて外にはないと述べ、その理由を詳論した。そして西尾が登壇し、政治上の意見を述べた。その後二、三の有志者の演説があり、宴会に入り、時事を論じて午後九時ごろに終了。

3　六月十九日、西尾は豊田郡天竜村の有志者土井藤次郎ほか数氏の発起で、同村万勝寺で開かれた懇親会に臨んだ。[3] 参集者は八十名余りを数えた。土井が主唱者総代として開会の趣旨を述べ、西尾が登壇して政治上の意見を開陳した。続いて浅井佐一郎（ママ）、外山武八、大杉善一郎、高橋某らの演説があり、午後十二時に閉会した。

2　支持者の新聞広告

東浅羽村、幸浦村の推薦人四十一名が、西尾を支持する新聞広告を掲載した。[4] 推薦人は有権者と見て誤りあるまい。

我ガ東浅羽村幸浦村ノ同志者ハ既ニ西尾傳蔵君ヲ以テ本県第五区衆議院議員候補者ニ推選セリ

浅羽市郎　武田松五郎　伊藤太郎八　伊藤伴蔵　原田豊吉　原源次郎　丸尾近一郎　原亀作　鈴木三作　久保万次郎　原林次郎　武田嘉七　加藤善次郎　加藤亀吉　原弥市　石川万蔵　川村新作　柴田長五郎　原太郎吉　原長次郎　寺井友吉　鈴木佐吉　谷川久吉　村井弥吉　金原要吉　柴田幸吉　原笹平　川村仙吉　金原竹次郎　原庄三郎　岡本与三郎　川村定吉　近藤梅吉　岡本滝治　議岡長八　寺井又吉　大石万蔵　近藤健次郎　永井六郎次　太田和吉　鈴木平吉

また同日、三川村の西尾支持者たち四十一名（これらも有権者と考えられる）の新聞広告が掲載された。[5]

我三川村同志ハ西尾傳蔵君を以て第五区衆議院議員候補者に推選ス

見取　雪島孫六　堀之内利平　鈴木翁太郎　丹羽伊吉　寺田藤重　吉田竹次郎　鈴木五郎平　寺田清五郎　鶴見市郎　名倉弥太郎　雪島伊平　寺田太平　鶴見宇太郎　鈴木宇平　丹羽善太郎　清水

善蔵　鶴見半六　雪島宗吉　小野田七三郎　雪島孫一郎　高橋伊太郎　寺田藤吉　堀内五郎次寺田宇吉　鈴木保吉　鈴木善次郎　鈴木権三郎寺田善作　松家弥一郎　高橋嘉市

山田　鈴木信太郎　金井平六

茅間　片桐孝一　藤田徳次郎

川会　久野大作　久野治一郎

友永　秋鹿五郎八　中村三郎代

大谷　鈴木儀一郎　太田半平　松井八郎平

この記事には、同村内の字名（見取、山田、茅間、川会、友永、大谷）が記されており、字（アザ）間での支持者の内訳が見られる点で貴重な資料といえる。

さらに、六月二十七日には、上浅羽村の五十四名の支持者（有権者）名簿が掲載された。(6)

伊藤幸太郎　鈴木宗次郎　久野勇馬　石川傳作　西野金作　戸塚七恵茂　太田善五郎　大河内市太郎　大河内寅十郎　加藤庄五郎　加藤恵三郎　加藤初蔵　田代五郎太夫　田代孫作　古池松次郎　古池類平　近藤弥文治　古池半蔵　浅羽新次郎　浅羽文三郎　鈴木惣重鈴木久平　村主芳三郎　永田義路　久保田長蔵　久保田利平　荒井丈平　西尾安五郎　西尾市郎　戸塚傳次郎　戸塚半恵茂　大石直衛門　大石伊之七　竹原新三郎　名倉由平　久保田仁平　久保田又吉　久保田又五郎　荒井市太郎　荒井伊藤治　同　平八　同　仁平溝口喜平　井浪信太郎　加藤太郎　大石利平　井浪市太郎　大石定治　大石喜八　村松綱吉　村松新蔵　村松治郎八　村松恵助　村松伊平

六月二十八日になると三川村の支持者の追加（五十三名）、及び西浅羽村の支持者（六十三名）が掲載された。(7)

我三川村同志ハ西尾傳蔵君ヲ以テ第五区衆議院議員候補者ニ推選ス

大谷　鈴木幸次郎　高橋治吉　松家友治郎　太田吉平太田久治郎　太田平治郎　松井喜平次　太田歌治　山下源太郎　木野孫八　木野伊太郎　高橋多満吉　太田義平　西尾安平　太田半平　山下藤三郎

友永　山中信太郎　石野九平　西尾傳治　西尾銀太郎杉浦啓吉　松本梅平　松本桃蔵　山中三次郎鈴木由太郎　橘治郎作　鈴木久四郎　鈴木倉吉八木仲太郎　八樹才一郎　鈴木権吉　天野喜藤治　天野熊太郎　井口弥与治　太田小平次　井口藤太郎　西尾傳三郎

川井　大場磯太郎　久野太平治　久野伊平　佐野与宗治　柳沢平内　大場千代蔵　大場嘉七　大場兼五郎　大場三男三郎　村松仁平　牧野忠治郎　土戸源治郎　平野治郎三　兼子辰十　渡辺政吉　渡辺惣十

我カ西浅羽村同志者ハ西尾傳蔵君ヲ適任ト認メ本県第五区衆議院議員候補者ニ推選セリ

溝口喜七　藤原彦太郎　戸塚幸太郎　藤原松吉　鈴木円吉　鈴木次郎吉　鈴木清五郎　萩原久四郎　藤原弥吉　鈴木弥五郎　藤原平九郎　竹原又太郎　鈴木久平　鈴木清七　鈴木平次郎　金原文五郎　金原清五郎　金原甚太郎　竹原平八　竹原浅吉　竹原治郎八　竹原八重司　竹原作吉　溝口政七　村松政太郎　大塚多蔵　溝口半七　溝口嘉平　大塚傳五郎　村松徳蔵　安井浅一　前島蔦五郎　前島竹十　溝口新六　金原比佐吉　寺井紋平　竹原善七　戸塚多郎吉　渥美民蔵　安間幸吉　松下政吉　太田貞次郎　高曽根喜平　金原新吉　金原角平　鈴木房吉　井田菊次郎　溝口兼次郎　渥美代次郎　竹田平三郎　永田作太郎　太田浅吉　戸塚伊之七　金原徳松　戸塚作蔵　大庭庄三郎　竹原重吉　永田岩吉　押田茂作　大石忠蔵　鈴木勇太郎　竹田又吉　赤塚太平

さらに選挙当日である七月一日付の『新聞』に豊田郡天龍村の支持者十七名の名前が掲載された。

静岡県第五区衆議院議員候補者ニハ西尾傳蔵君ヲ適任ト認メ推選ス

豊田郡天龍村万正寺

大石佐次郎　清水嘉平　柏木金蔵　鈴木定吉　大石岩吉　大石亀吉　鈴木長重　柏木春吉　藤村東岳　鈴木喜次郎　安田八蔵　清水吉十　安田儀平　大石多吉　土井政徳　土井藤次郎　大石七郎次

右広告人

土井藤次郎

清水嘉平

大石佐次郎

また、次のような単独で西尾を推薦する広告も現れた。(8)

予ハ温厚着実ニシテ且ツ清廉潔白ナル西尾傳蔵君ヲ推シテ我ガ第五区衆議院議員候補者ニ戴ントス

静岡県豊田郡中泉町　市川新三

選挙当日とはいえ、いまだ投票を決めかねている選挙人に対して、これら多数の支持者（有権者）を公表する新聞

広告が与えた影響は小さくはなかった。

以上の推薦広告に載せられた選挙人の支持者数だけでも二百七十名の多きに上った。西尾傳蔵は地域の有力者という立場を最大限に利用し、丹念に選挙人の勧誘を繰り返し支持者層を拡張した。これは在京の候補波多野にとっては真似ができない点で、この点で西尾に後れを取っていた。

3　評価

結果的に波多野との接戦を制した西尾の勝因はどのような点にあったのであろうか。西尾が最も頼りにした参謀は久野治太郎であり、次いで大杉善一郎、浅井才一郎、外山武八、高橋某等であった。また彼らは懇親会活動の重点を豊田郡においたようで、未だ支持者が浸透し切れていないと見たためであろうか、五月二十五日は豊田郡赤佐村（三、四十名が出席）、五月二十九日は豊田郡敷地村（選挙人五十有余名が出席）、六月十九日は豊田郡天竜村（八十名余りが出席）というように懇親会を組織している。無慮の聴衆がつどう演説会よりも懇親会は有権者を集め、宴席を設け個々人を相手に飲み、語り、説得するので引き込む効果は大きい。

新聞紙上における支持者（「ほぼ全員が選挙人」と見てよい）[9]の広告では、選挙人たちが明確に西尾支持を表明した。西尾の懇親会活動は波多野や寺田に比べると非常に少なかったが、新聞広告の掲載では他を圧倒していた。その質と量からいえば、彼らの戦略は各村各戸の選挙人を確実に押さえていくことにあった。これらから見て西尾の選挙活動の重点地域は、明かに最大票田である山名郡と豊田郡の両郡に絞られている。その運動方針はやがて功を奏することになるのである。

なお、前記したように西尾の政治的な所見が新聞紙上に散見されるが、それらは波多野の政治的見解に比べ幅が狭いように思われる。

（1）五月三十日付『新聞』。
（2）六月四日付『新聞』。
（3）六月二十一日付『新聞』。
（4）六月二十二・二十四・二十五・二十七・二十八日付『新聞』。
（5）六月二十二・二十四・二十五日付『新聞』。
（6）六月二十七～三十日付『新聞』。
（7）六月二十八～三十日付『新聞』。
（8）七月一日付『新聞』。
（9）新聞広告の支持者名簿が、散逸した『選挙人名録』とほぼ一致を見るという点に関しては、拙著・前掲『日本

初期選挙史の研究』の第四章で論証しておいた。

四　他の候補者たちの選挙運動

1　寺田彦太郎の演説会

1　五月中、寺田は余りはなばなしい運動は行っていなかったが、彼がそれまで波多野以外の候補者の進入が許されなかった周智郡内へ乗り込んだのは、五月二十六日のことで、山梨村周南学舎で開かれた懇親会に臨んだ。[1] 当日は大雨烈風の中、飯田、宇刈、山梨、円田各村の有志者七十名余が参会した。村松藤十郎が開会の趣旨を述べ、次いで足立長九が候補者選挙上の心得について演説し、そして寺田が拍手喝采のうちに登壇し「初期の国会において議員たるものの、正に尽すべき要点」を述べた。次に高橋悦次郎が「立憲政治の大要」を述べ、その後宴席に移った。席上、多米八郎は「税法の改良、政費の節減より条約の改正」を説き、「最も人民の頭上に直接の関係を有する要点を挙げて第一期の国会に要望する事柄」を演じた。次に、川島滝蔵は「第五区の各候補者を比較的に論究して地方自治」に説き及んで「遂に輸入候補の不可なる所以」を論じた。献酬の合間に各々時事を談じて閉会したのは午後七時であった。なお多米八郎は改進党系の同好会の幹事であった。[2]

2　五月二十七日、寺田派は、森町大黒楼において懇親会を開いた。[3] 森町の天方一宮、円田の内円田、草谷らの同志者六十余名が来会する中、多米八郎が開会の趣旨を述べ、かつ演説を行い、次いで足立長九、寺田の順で弁論があった後酒宴に移った。席上川島滝蔵が演述し午後九時に散会。

3　六月三日午後五時、寺田の一行は、山名郡久努村の有志者足立貫一、足立英三郎ら発起人の招きで同村桂目舎において懇親会を開いた。[4] 聴衆は九十余名。足立英三郎が開会の趣旨を述べ、次に多米八郎が政費節減、税法改良、地方自治、言論責任などの諸問題を一括して逐一例証を挙げ論じた。また高橋悦次は第一期国会には経歴、知識、胆力、忍耐、忠実の五つの性格を具備する者を選出して国民の本分を尽くさん、と論結した。秋野茂一郎は官尊民卑の弊害はいまだなおその跡を絶たず、そのために世にも忌まわしい御用候補が出馬して、種々の方便をもって各地に散在し、しきりに官閥の永続を図ろうとしている。実に奇怪千万であり本区の選挙民は誓ってこのような手段に瞞着されないよう勉めて真正な立憲治下の民たらんことを期す、と述べた。寺田が登壇し、本邦の形勢から説き始め、欧米各国が東洋に対する政略の如何を子細に論じ、「今や我が

国は累卵も啻ならさる有り様に陥っているにもかかわらず、内政の如何を顧みるとき、まさに国家の大計を誤らんとしている。この時に当たって、これを矯正するためには各自その業を励んで国力を培養する必要があることはもちろんであるといえども、忠実の志をもって国家のために尽くさなければ、到底その目的を達することができない。いわんやまた国家の拡張においておや（ママ）」と最も痛切に論じてその局を終えた。次に足立長九郎（ママ）は第五区四候補者の品評を行い、候補者の品性資質を子細に批評し、寺田の候補者として最も適任なる所以を述べて喝采を博した。酒宴に移り退散は午後七時ごろであった。

4　翌四日午後六時より寺田は、周智郡久努西村の海蔵寺において地元有力者永井五郎作、山田多三郎、久野藤蔵、鈴木要作、村松茂平ら五氏の主唱で開かれた久努西村・山名町連合懇親会に臨んだ(5)。来会者は九十余名。永井がまず立ち、選挙人たるものは情実に拘泥せず官位に幻惑されずよくその任を辱めない代議士を選出し、立憲治下の民たるに恥じないことを期すべきである。これが他の候補者の非なる所以を説く理由である、と論じた。次に高橋悦次は、候補者として適当な人物を求めるには、従来の経歴、行為に徴して、将来を展望する意見を述べているかどうかでもって判定すべきであり、いたずらに外形や空論に惑わされて貴重な選挙を誤ってはならないと弁論した。次いで秋野茂七郎は、候補者たちの競争激化していろいろと醜い争いが演じられているが、我が国家のためを思うとため息の出る思いである。それは候補者の罪であるといえども、選挙人においても卑屈無気力のなせるところでもある。したがって地方有力の士はその弊風を矯正して誠実潔癖なる代議士を選出することに勉めるべきであると、一々事実を挙げてこれを痛論した。続いて登壇した寺田は、我が国家の形成から外国の形勢までを説き及ぼして我が国民の独立の気風を養成し国家をして泰山の安きに置き、永くその美を海外に冠絶せしむべし、と論じた。次に立った多米八郎は政費節減、税法改正、言論責任、地方自治の四項目について一々例証を挙げて一時間半もの長演説を行った。足立長九は四候補者の品評を行い喝采を博した。その後甲献乙酬の間に時事を談じて夜九時ごろに退散した。

5　寺田は五日、富里の松秀寺において開催された、山名郡の西浅羽村と豊浜村合同の懇親会に出席した(6)。懇親会といっても百五十名もの出席者が集まるという盛会ぶりであった。主唱者は地方有志者の浅原仲次郎、秋野貞次郎らであった。主唱者総代の仲原は、

今や衆議院議員選挙の期切迫したれば我々選挙人たるものは候補者その人の意見はもち論従来及び今日の行為経歴を探検し以って真正の人物を選出すべきなり予は各候補者の競争場裏に眼を注ぎまたその人々の性行を探偵するに実に言語の以て発すべからざるものあるに驚けり故に軽々候補者を定むるときは実に予想のほかに出づることは予が保証する処なり世間往々肩書に幻惑し又はその金満家たりその人望家たるに赴むくもの多しといえども一朝人物の選挙を誤るときは国民の不幸これより大なることあるべからず此れ我が今日寺田氏を聘しその意見を聞かんと欲する処なり

と演じた。次に秋野は「官尊民卑の余弊より説き起こし一層国民の気力を培養し卑屈の精神を蝉脱せしめざるべからず」と実例を挙げて弁舌した。高橋悦次は立憲政体発達の原因より将来の注意を簡単に述べ、政治家たる者は公徳の特性があるものでなければいかに口弁があり才略があっても我々は安心してこれに任せられない、と快活に論結した。次に寺田は拍手喝采のうちに登壇し、日本国の形勢と外国の状態を丁寧に説明し、今後は「国家の富強、国権の拡張、帝室の安富尊栄は我々四千万人の方針一途にあり」と論じた。満場の拍手は暫く止まなかったという。続いて多米は前述した四項目を詳細に述べ、足立長九は四候補の人物について一々評論した。懇親の席で再び多米は四候補者を比較し、寺田こそ政治社会に立たさなければ我々の恥辱であるとまで述べ、参会者の賛同を求めた。

6　六月六日、寺田は山名郡於保村の有志者鈴木宗一郎・中村長吉らの主唱で、午後四時から同村竜法寺で開催された懇親会に出席した。[7] 中村が開催の趣旨を述べ、続いて秋野茂七郎、高橋悦次、寺田、多米八郎、足立、川島滝蔵、小田弥三郎らが演説した。

7　六月八日、寺田は午後四時から山名郡東浅羽村の有志者久野勇馬、浅羽要太茂らの発起で開催された東浅羽・上浅羽・幸浦三か村の連合懇親会に臨んだ。[8] 出席は百五十余名。久野が開催の趣旨を述べ、秋野茂七郎、高橋悦次、寺田、多米、足立らが順次演説し午後九時ごろに散会した。

8　六月九日、寺田は御厨村南部、及び福島村の内中島の有志者が催した懇親会に臨んだ。[9] 聴衆九十余名。八木良平が開会の趣旨を、高橋、相場長平、寺田、多米、足立らが演説し九時に散会した。

9　六月十一日、豊田郡長野、天竜、袖浦三ケ村の有志者堀内五郎、穂積豊、土井藤次郎らの主唱で、寺田を長野村竜門舘に招き、懇親会を開いた。[10] 同舘入り口には「第五

区衆議院議員候補者寺田彦太郎君懇親会」と大書した表札が掲げられた。午後三時頃から約二百名の会員が集まり、席が定まると穂積が登壇して開会の趣旨が述べられた。高橋、寺田、多米、足立らが各々意見を述べた。その後酒宴に入り、相場、川島、高橋らが演説した。

10　六月十四日、山名郡笠西村の有志者高橋悦次、塩谷述太郎、外数氏の発起で、寺田一行は午後五時から同村高尾の寺院で開かれた懇親会に出席した(11)。参加者は六十名余り。高橋が開会の趣旨を述べ、寺田、多米、足立長九郎(ママ)らの演説後、宴会が開かれ午後十一時過ぎに散会した。

11　六月十六日、寺田は、山名郡御厨村地方の有志者鈴木治三郎、柴田八郎、安西涛一、和田与平次、名倉久吉その他の主唱で開かれた御厨村の内三区、及び田原村の内数区合同の懇親会に臨んだ(12)。九十名余りが参会。安西が開会の趣旨を述べ、高橋、川島、寺田、多米、足立の順に演説し、献酬の間に時事を論じて午後十一時過ぎに散会した。

12　六月十七日、寺田は豊田郡向笠村の有志者青島保吉、永田一馬諸氏の主唱で同村寺院において開かれた懇親会に出席した(13)。六十名余りが参集した。寺田某と上野博之両氏が寺田を招いた理由を述べ、高橋、寺田、多米、足立が順次演説した。献酬に移って午後十時に散会した。

なお、山名郡の有力者富田良兵衛は長らく選挙戦を傍観しだれにも加担せずに今に至ったが、漸く寺田を支援することを決意した。ただ支援するのみならず進んで勇将として力を尽くすことになった、と六月十二日付『新聞』は報じた。

2　足立孫六の演説会

選挙区にその人ありといわれた元周智郡長足立は、その運動開始があまりに早過ぎたため他候補の攻撃の的になった(14)。そのために苦戦して一時運動を中止した。侵略した領分も他の候補者に奪われ、どこからどこまでが自分の有に帰したかが分からないという有様に陥った。例えば六月五日付『新聞』は、山名郡の某氏は足立が立候補すると早速尽力し労を取ったが、西尾が立ったと知ると足立を見捨てて西尾に加担した、と報じている。このままでは勝機を逸すると悟った足立は保守系の坂本清策と大同派の山岡昂三を呼び寄せて今一度運動の立て直しをはかり、演説会活動を始めた（ただし足立自身の出席は確認できない）。

1　まず別働隊としての前島豊太郎らの動きが見られる。彼らは五月三十日、豊田郡小鹿竜雲寺において演説会を開催した(15)。同じ自由党系の足立を援護する演説会であった。聴衆は五百余名。前島格太郎が会主に代わり開会の趣旨を

述べ、杉山広吉、川勝六象、松井民次郎、森本大八郎らが選挙民の注意を促した後、前島豊太郎が立ち、議員選挙者に告ぐ、と熱心に説いたという。

足立派は一時選挙運動を中断していたが、他方で各候補の運動が激化してきて、ことに波多野派が最も勢力を伸ばし、西尾、寺田らがこれに次いだ。沈黙していた足立派は、本月一日ごろより運動を再開し周智郡から山名郡に進み、波多野派の占領地である浅羽に入って公開演説会をもって攻撃し、成果を上げつつあった[16]。

2　六月八日、磐田郡見附町の磐田座において足立を支持する政談演説会が開かれた[17]。弁士は本多増、大橋頼模、前島格太郎、同豊太郎たちで、『新聞』は足立の提灯持ち演説とやゆした。その弁舌は他の候補者の非難攻撃に終始したが、中でも某弁士は波多野を激しく非難した。その要点は、波多野は立候補するに当たり外務書記官を辞するとしたのにも拘らず、かえって非職を命じられたことを快く甘受して非職俸給を受け取っているのは無節操である、という点にあった。しかしこの波多野への非難は逆に非職郡長として俸給を受けている足立を非難することに跳ね返って、聴衆の感情を著しく害したと『新聞』は伝えている。

3　六月二十日、足立派の弁士たちは、豊田郡富岡村気賀西の餞春院において午後六時から演説会を開催[18]。聴衆は三百余名。会主村松半三郎が開会の主旨を述べ、関口清策が「国会の組織及び議員選挙の標準」、前島格太郎が「吾党の目的」をそれぞれ演説して午後十一時ごろ閉会した。両人とも波多野を厳しく攻撃したという。『新聞』は足立派の演説会を冷ややかに評論している。

4　六月二十二日、足立派が豊田郡敷地村において開いた懇親会に足立は欠席したことを『新聞』は酷評した[19]。弁士の演説も無かったという。また同夜、不調の懇親会のまでは終えられないと急遽設定した向笠新屋での演説会では、弁士前島格太郎の到着したころには来会者の多くは酔が回り帰宅し始めた[20]。主唱者三名だけが居残ったらしい。これは投書による記事である旨『新聞』は報じている。

ところで、足立の新聞広告は以下のとおり[21]。

足立孫六氏（大同派員）ヲ第五区衆議院議員候補者ニ推戴ス

松島吉平　外同志者

全体的に以上の記事をみると、改進党寄りの『新聞』は自由党候補である足立を冷ややかな態度で見ていたことが看取できる。

3　粟田輝永の演説会、及び松島吉平の立候補辞退

粟田輝永は六月二十五日、豊田郡赤佐村岩水寺で開かれた懇親会に出席した[22]。来会者は三、四十名。伊藤行蔵が開催の趣旨を述べ、粟田は大同派の綱領五ケ条について演説。外に高橋二男三郎、池本博らが演説して閉会した。

彼はその後、候補を辞退したためか、得票が確認できない。総選挙後に県会議員に選ばれている。

粟田の経歴が『静岡県名士列伝』に掲載されている。彼は嘉永三年正月二十八日周智郡犬居村に生まれた。父三郎太夫は掛川藩に籍があった人物である。

松島吉平は「迂生聊有所志為我第五区之衆議院議員候補者謹謝絶于数百名之有志諸君」という新聞広告を出して第五区からは出馬せず、第六区の候補者となることを五区の支持者にことわった[23]。

松島はその後、改めて当区からの立候補を辞退する広告を出すが、ひそかに再度選挙人に出馬の相談をしたと伝えられた[24]。それによると、松島の親戚である某氏をして、その二、三日前に赤佐村尾野のある人物を訪ねさせ、松島への選挙協力を求めたが、既に候補者は定まっているので難しい旨返答があった。『新聞』は、いやしくも松島ともあろう人物がそのような振る舞いをするとは思えない、何かの誤報であろう、と記している[25]。

(1)　五月二十九日付『新聞』。
(2)　前掲『静岡県史　通史編6近現代二』二七八頁。
(3)　五月三十日付『新聞』。
(4)(5)　六月六日付『新聞』。
(6)　六月十日付『新聞』。
(7)～(9)　六月十三日付『新聞』。
(10)　六月十四日付『新聞』。
(11)～(13)　六月二十一日付『新聞』。
(14)　六月五日付『新聞』。
(15)　六月一日付『新聞』。
(16)　六月十四日付『新聞』。
(17)　六月十二日付『新聞』。
(18)　六月二十二日付『新聞』。
(19)(20)　六月二十六日付『新聞』。
(21)　六月二十四～二十八日付『新聞』。
(22)　六月三十日付『新聞』。
(23)　六月一・三・四日付『新聞』。
(24)(25)　六月十八日付『新聞』。

五　投票、選挙会

第五区内での投票の模様は、山名郡田原村のものが簡略に伝わっている。[1] 同村西島の全海寺で行われた投票は平穏に閉会したという。立会人は鈴木太吉、多倉太郎馬、柴田八郎三郎、大滝平七の四氏であった。

さて、同区の選挙会は、三日と四日の二日間にわたり、見附町報徳館において開かれた。[2] 選挙区が広大で遠隔地からの投票函の到着に時間がかかるため、二日にわたる選挙会が設定されたのである。

選挙会長は池田郡長が務め、書記は県、鈴木、林、山本の四郡書記が任じた。[3] 春山、宇田、関川、河合、大庭の五人の雇いが午前七時に会場に臨んだ。選挙会長は直ちに各町村選挙立会人の中から抽選で豊田郡長野村堀内五郎、石川孫十郎、同郡今井村本多善四郎、同郡滝川村和田佐太夫、山名郡福島村寺田類太郎、同郡於保村本間嘉吉、磐田郡見附町匂阪勝蔵ら七氏の選挙委員を決めた。[4] その中の堀内五郎は六月十一日の寺田の演説会の主唱者の一人である。

参観人は、三日は二百七十余名、四日には百八十余名と多数をかぞえたが、勝敗の行方を見守る厳粛な空気が終始会場を支配した。激戦が繰り広げられただけに、開票の際には騒動でも起こるやもしれぬ、と記者は書き記している。[5] 静岡県警としては本署からは板垣警部が臨場し、望月見附警察署長ほか五名の巡査が警備に当たった。

選挙結果は以下のとおりである。[6]

当選者

七百四十六票　西尾傳蔵

次点者

六百四十五票　波多野承五郎

五百三十九票　足立孫六

二百四票　寺田彦太郎

西尾の当選が判明したのは四日午後二時五十分以前であったようで、七月五日付の『新聞』は四日同時刻の見附発の電報で、西尾と波多野の票数を正確に本社に送っている。

改進党の波多野や自由党の足立との大接戦を制しての勝利であった。

七月七日、西尾は他区の当選者である第一区井上彦左衛門、第四区岡田良一郎、第六区近藤準平らとともに、県庁に行き、衆議院議員当選を承諾した。[7]

七月十五日、県知事時任為基の名で告示第三十三号により西尾を含む全七区の八名が当選人として確定した。[8]

（1）　七月四日付『新聞』。

（2）　七月六日付『新聞』。なおこの区の選挙人名簿の縦覧

は既に五月五日から豊田磐田山名郡役所で行われている（五月七日付『新聞』）。

（3）～（6）七月六日付『新聞』。

（7）七月九日付『新聞』。

（8）七月十五日付『新聞』。

結びに代えて

以上、慶應義塾出身波多野承五郎を中心に、第五選挙区の第一回総選挙における各候補者の選挙戦を見てきた。波多野の演説会活動は他の候補に比べ回数とその内容において群を抜いていたが、地の利を生かし、縁故で結び付いた西尾の選挙民との深いつながりは思いの外強固であり、波多野をもってしてもこれを突き崩すことができなかった。波多野にとり誠に惜しい敗北であったといわざるを得ない。

ところで、この区での選挙運動を通覧して、新聞紙上に見える各候補者の政談演説会での演説内容を多少とも知ることができた。またそれとともに、各候補を支援する地方有志というものの実態や演説会・懇親会の運営の在り方を垣間見ることができた。

そして勝利した西尾が、その選挙運動において新聞広告の威力を認識し選挙民の支持者名とその住所を掲載し、その支持勢力の領域を誇示することによって、他の選挙民の投票意欲を刺激し、呼び起こして実質的な選挙人獲得に乗り出したことは極めて有効な方法であることが分かった。

ところで前掲した『静岡県史　通史編6近現代二』に「第五区の候補者西尾傳蔵、波多野承五郎、寺田彦太郎の各町村の政談演説会の参加者を『袋井市史』に収録されている各町村別投票数と比較してみると、参加者数がその町村の投票総数を大きく超える例はそう多くない。参加者の中には他町村の者がいたり、また同町村でも不支持者で参加しなかった者がいたことを考慮しても、政談演説会や懇親会が選挙権を有する者を対象として開催されたことがうかがえる。このことは、かつての自由民権運動とは異なり、選挙運動の対象が地方の地主層などの有力者に狭められたことを示している。こうした活動基盤の限定は、議会開設後の「民党」の活動を規定していくこととなった」と述べられている。[1] 確かに、演説会の参加者数は他区に比べると少ない。波多野の演説会では二百名前後の聴衆が集まっているが、西尾や寺田、足立の演説会・懇親会の聴衆はほとんどが百名以下である。それは選挙権を有する者に絞られていたから、という同書の見解は当たっていると思う。た

だ、これらの数字は、他区での演説会来場者数と比べるとかなり少ない。第三区の岡山兼吉の演説会などは例外ともいえるが、一千名を超えるときがあったし、第一・二区での演説会でも各村参加者数は三百前後の場合がしばしば見受けられる。[2] したがって、第五区の演説会参加者数のみをもって上のごとき論を一般化することには躊躇を覚える。もう少し具体的事例を検討する必要があろう。

さて七月十三日、静岡市栄町大東館において当県の同好会（発起人総代斎藤和太郎）が組織した祝宴が、当選者たちを集めて行われた。[3] ほかに発起人として鶴田勇次郎、近藤壮吉、前田五門、松川宰吉らがあがっている。第七区の依田佐次平と江原素六を除く六名が列席した。その場において西尾が話したことをもとに記者は、彼について「氏は同好会員にして勿論改進主義なり然れども常に曰く余は改進党に非らざれども改進主義ならずんハ国家の安寧幸福を進捗する能ハずと信ずるなり」と評した。[4]

ところで西尾は当選を果たすや、この年の十一月二十九日に開会された第一議会で立憲改進党の議院内での会派である議員集会所には入らず、吏党寄りの大成会に所属した。大成会には静岡県の岡田良一郎（第四区）や近藤準平（第六区）、依田佐二平（第七区）らも参加した。近藤も先の同好会では改進党と目されていた人物である。方向転換である。彼らは次の総選挙で全員が落選している。

明治二十四年十一月二十六日開会の第二議会では、近藤は改進党の議員集会所に所属を変更するが、かたや西尾は独立倶楽部に所属を変えた。独立倶楽部は大成会の一部と無所属議員の一部を合わせた会派で十九名からなる組織であった。当選後における西尾の所属会派の度々の変更は、選挙区有権者の信頼を減じさせる一因になったであろう。

明治二十五年二月十五日の第二回総選挙で西尾は大敗し（獲得票数九四）、足立孫六（自由党、第三～五議会では弥生倶楽部に属す）が当選した（獲得票数一、一九三）。

波多野はこの第二回総選挙でも八四三票という多数の票を獲得したが、第二位となり足立に敗れた。足立は第一回総選挙では第三位に甘んじた候補者である。

ちなみに第三回総選挙（明治二十七年三月一日）でも足立の優位は変わらず（自由党、獲得票数一、四五二）、第二位の西尾（国民協会、獲得票数八百）を突き放した。そしてついに波多野はこの時出馬をしなかった。

第四回総選挙（明治二十七年九月一日）になると立憲改進党の寺田彦太郎（獲得票数一、二二〇）が一位に躍り出て、足立（獲得票数一、一四〇）を破っている。[5] 波多野に

出る幕はなかった。第一回総選挙では四位と低迷した寺田であったが、それから四年後にしてはじめて雪辱を果たし（寺田は第七・八議会では立憲改進党、第九～十一議会では進歩党に所属）、以後は憲政本党に所属し、長きにわたり再選を繰り返した。(6)

この第一回総選挙の立候補者たち上位四名は、いずれ劣らぬ政治力の持ち主であり、衆議院議員となり得る資質を備えていたといえるであろう。しかし中でも波多野の議員となる日は遠く、大正九年の第十四回総選挙での当選を待たねばならなかった。

（1）前掲『静岡県史　通史編6近現代二』二八七頁。
（2）拙著・前掲『日本初期選挙史の研究』を参照のこと。
（3）七月十五日付『新聞』。
（4）七月十五日付『新聞』。
（5）『静岡県史　資料編17近現代二』平成二年、二五四頁以下を参照。
（6）『第一回議会乃至第五十五回議会衆議院議員党籍録』（衆議院事務局・昭和三年）。

附一　当選者西尾傳蔵の略歴

第一回総選挙までの西尾傳蔵の経歴を鈴木良平・岡田多作・阿部五六郎編『静岡県名士列伝』（明治二十三年五月刊）、および山名英三郎編『静岡県国会議員候補者列伝巻之上』（明治二十三年三月刊）、『新聞』（明治二十三年七月六日付）等で互いに補いながら以下に略述しておこう。

彼は安政元年十二月十日（『候補者列伝』『新聞』は十一月十日とする）、豊田郡友永村（『候補者列伝』『新聞』は三川村友永とする。これが正しい）に生をうけた。その祖先は源朝長の属員で朝長の居城が本村にあったのでここに居住したという。姓の西尾はその昔三河国八豆郡西尾に住したことに由来する。長じて鈴木宗光、杉浦翁の門に入り漢学を研き、馬杉雲外について詩文を研究した。書は古田桂所に学んだ。その性格は温厚沈毅で少しも誇るところがなく、衆に称賛され人望が厚い所以であった。

明治四年九月戸籍法が発布されその御用取扱を命じられ、同年十月第四十二小区戸長を、同九年一月第二大区十五小区区長兼学区取締を命じられ、同月地租改正につき改組区総代人および第十二大区十三小区改組総代人兼務を申し付けられた。同年十一月二十四日静岡県県会議員（『新聞』は同十二月浜松県県会議員とする）に選任された。この年各地の警察上のことにつき意見書を提出した。同十年二月

第十大区副区長を兼務申し付けられ、かつ第十一大区会議員並びに県会議員に公選された。同十二年三月豊田山名磐田郡書記に任じられ、同十四年一月願いにより本官を免じられ（『新聞』は十三年某月辞したとする）、また静岡県県会議員に公選された。同十五年十一月農工商諮問会員を申し付けられた。同十六年十月豊田山名磐田郡長に任じられた。事をなすに序を失せず、郡務よく整理し教育衛生勧業など改良進歩の緒を啓発し、郡利民福を企図すること少なくなかった。郡の人々は彼を敬服しその命に従ったという。三大工事と称された社山疎水工事起業に際し、二年間実地監督を県知事から命じられ、事にあたって日夜尽力し倦怠の色を表さなかった。八年六月願いにより郡長を免じられ、同十九年一月豊田郡県会議員に公選された。二十年中遠私立教育会総理に推挙された。同年五月大社教管長より権少参教を申し付けられ同年辞した。同年十一月所得税調査委員に選挙され、同二十一年二月静岡県会常置委員に選挙された。二十三年二月県会議員半数改選に再選された。

これより以前に、明治十一年地方の同志者と謀って磐田郡見附町に第百弐拾四国立銀行を創設し、その取締役に推挙され、また同十八年に中遠私立衛生会を起こしその会長に挙げられた。このほか、献金寄付金および救助金などは一々挙げるに暇がないほどである。

常に国事に志を傾けており、明治九年には警察上の意見書、同十年の地方風俗および教育についての所見を書をもって政府に建言した。さらに同年殖産事業を政府に建白した。明治十五年東京立憲改進党に加入したが（『候補者列伝』）、同十六年故あって同党を脱した。政治上の主義は改進であったが、総選挙時点においてどの政党にも与しなかった。前記したとおり、帝国議会開会後、彼は民党である改進党に属することはなく、吏党系の大成会（第一議会）、独立倶楽部（第二議会）を渡り歩いた。そのために選挙民の信頼を失い、次回の総選挙では下記の足立孫六（自由党）に議席を奪われることになるのである。

附二　落選者（第三位）足立孫六の略歴

足立孫六については前掲『候補者列伝』及び『静岡県周智郡誌』（昭和五十五年）に記されている。足立は天保十四年九月城東郡丹野村三橋家に生まれた。その後周智郡山梨村山科の足立家に養子として入った。幼少に野賀岐山に入門し専ら経書を修めた。俳諧を柿園嵐中に学ぶ。号は湛水、また松園看山居とも号した。明治元年二十一歳のとき、

領主鍋島穎之助より郡中割元大庄屋を申し付けられた。同六年浜松県第二大区十七小区区長となる。同八年区内凶荒徴租の義につき県庁の処分に服せず、そのため職を止められた。同九年三月浜松県十五等出仕に補され庶務課戸籍係を命ぜられた。当時遠江国は地租改正で民心騒然としていた。足立は係にあって民会の欠くべからざるを論じ、るる建議するところがあった。同年五月浜松県権少属に任じ第二課詰を命じられ、当分第一課区画ならびに社寺取調専務を申し付けられた。同年六月民会掛を命じられ、浜松県民会組織のことに従事。当時、民会が設けられた他府県は例を見なかった。時に浜松県廃止の令がありその職を解かれた。同年十一月静岡県第十二番中学区取締に任じ、翌十年一月第十一大区区長兼学区取締医務取締を申し付けられた。当時遠州の地米価下落し石代相場の半額となり民は金納に苦しんだ。足立は地租代納買い上げ米願いを主唱し、選ばれて遠州の委員となって上京請願し、その効あって石代相場に等しい価格をもって買い上げられることとなった。同年三月第十大区区長岡田良一郎出京中、当該区長兼務を命じられた。同十月遠州地租改正の残租金十五万五千円の納付に州民は苦しんだため十カ年賦とした後、さらに五十カ年賦に敷衍するを得た。同十一年三月県会議員に選任。同県会選挙法改正につき解任される。同十二年三月周智郡長に任命される。同十九年官制改革があり八月さらに周智郡長に任じ、奏任官六等に叙せられた。同年十一月正八位に叙せられ、同二十年十二月上級俸を受けた。同二十一年非職を命ぜられる。在職中、道路を開き車道を新設し殖産を奨励、興業を勧誘する。在任中、森町以北崎嶇たる山脈を開拓し、十有余里の車道を開いた。ために道路郡長の名があった。また在任十年間に茶繭米麦共進会を開くこと十回におよんだ。率先して蚕桑を試みたので中遠地方養蚕家の称があった。また社山疎水工事では隧道七三〇間の難工事をともなった。西天竜の水を引き込み山名郡地方灌漑の便に供さんとして、足立が大区長のときに発起し、その郡長たる郡七十一か村水利土功会管理を命じられ、自ら困難の衝に当たる。明治十六年以降はあたかもそれが彼の本務であるかのごとく、これに専念した。しかし最終的に予算不足、測量の誤りなどで任を解かれた。二十二年春奥羽地方に遊び養蚕業を実地検分し、秋には北海道を漫遊した。二十三年衆議院議員候補者に推薦されたが、彼はまた静岡県貴族院多額納税者選出議員の被選権をも有した。政治上の主義は平民的自由平等にある、とされた。